

彼らはなにゆえに差別されるのでありましょうか。

2022年

公演日時

11月3日(祝・木) 19時

11月4日(金) 19時

11月5日(土) 19時

11月6日(日) 14時

会場

― 那覇文化芸術劇場なはーと 小劇場

アフタートーク登壇者

11月3日(祝・木)

長塚圭史(劇作家・演出家・俳優/KAA(神奈川芸術劇場)芸術監督)

兼島拓也(劇作家)

佐藤尚子

知念あかね

11月4日(金)

津波信(俳優/TEAM SPORT JUMPER主宰)

今 科子

仲嶺雄作

西平寿久

11月5日(土)

小原真史(展覧会・帝国の祭典―博覧と人間の展示―キュレーター)

知念あかね

11月6日(日)

上江洲朝男

金 間 愛

知念あかね

※進行は各回とも那覇文化芸術劇場なはーと担当事務が務めます。

那覇文化芸術劇場なはーと 沖縄復帰50年特別企画

喜劇『人類館』

作・知念正真

演出・佐藤尚子、知念あかね

企画監修・上江洲朝男、金 間 愛

出演・今 科子、仲嶺雄作、西平寿久

戯曲『人類館』とは？

じんるいかん

演劇集団「創造」の創作劇第一作として1976年7月に初演。同年10月「新沖縄文学」33号に発表されたのち、77年には大城立裕の推薦により雑誌「アトロ」に掲載され、78年に第22回岸田國士戯曲賞を受賞。「演劇界の芥川賞」と呼ばれる同賞を受賞した初の沖縄戯曲。

1903年の大阪・第5回勸業博覧会会場近くで開催された「学術人類館」に発する「人類館事件」を出発点に、日本語、沖縄口、沖縄大和口を使い分けつつ織り交ぜ、場面展開にも実験性を持たせた画期的な作品だった。「人類館事件」のインスピレーション源は大田昌秀『醜い日本人』(69年)だったという。76年8月には先島公演を行い、78年には東京、79年には大阪公演が行われ、その後も「創造」によって上演が続けられた。劇団レクラム舎や劇団青年座による上演もなされ、知念正真の娘である知念あかねのAKNプロジェクトによる上演は、2021年の配信版を経て今回が二度目。戯曲には著者自身によって数度の改訂が加えられ、初版にあった富村順一の「東京タワー事件」や三島由紀夫の自決(いずれも1970年)、沖縄国際海洋博覧会(1975・76年)への言及はのちに削除されている。執筆当時の作者の言葉によれば、「人類館」は以下のような作品である。

戯曲としての「人類館」は、二つの構造を持っている。人類館を起点として、そこから起る、もてはまき返される、幻想(回想)シーンの、恣意的、無差別の騒乱と、「人類館」という名の精神病院の中で展開する、医者と患者のリハビリテーション(社会復

演劇集団「創造」とは？

演劇集団「創造」は、幸喜良秀、中里友豪、平田嗣弘、桑江常光らの呼びかけによって、1961年4月21日、越来城址(現・沖縄市)の隣にある城前公民館にて結成総会を開き、活動を開始した。活動拠点はコザだった。

立ち上げの背景には1951年に結成された琉球大学演劇クラブの活動があり、幸喜や中里はその出身者だった。61年9月の中の町劇場(コザ市)における旗揚げ公演は、アルジェリア独立戦争を背景にフランスファシズムと戦うインテリの抵抗を通して人間性の勝利を謳い上げたジャン・ミユール原作、ふじたあさや作『太陽の影』。その後、『アンネの日記』『島』『日本の幽霊』などを上演。状況変革と自己変革をビジョンとして演劇活動を続ける中で、60年代半ばから創作劇への意志が高まり、76年に創作劇第一作として「人類館」を発表。沖縄演劇界に衝撃を与え、77年の沖縄タイムス芸術選賞「演劇部門」を受賞した。そこから次々と創作劇が生まれ、中里友豪「ある半狂人の思い出」(82年)、玉木一平「さらば軍艦島」(83年)、謝名元慶福「海の一座」(85年)と続いた。2016年には又吉英仁「タンメーたちの春」(演出・幸喜良秀)で「創造」創立55周年を迎えた。「人類館」後、「創造」において知念正真は「コザ版どん底」(86年)、「コザ版ゴドー」(88年)、「命かんば」(93年)を書き、『幻のX調査隊―うるま島炭鉱異聞』(97年)が最後の作品となった。

演劇集団「創造」の規約前文は以下のとおり。

われわれは、勇気と誇りを持って演劇活動を展開する。われわれは、現実がいびつであることを知っている。ブルジョアの安定の中で、いびつは日常化されつつある。

われわれは素直に恐怖しなければならない。死滅する夥しいエネルギーを傍観し、恭順な思想で抒情することは、すでに許されない。

それこそは、非生産的かつ冗漫な自己充足にはかならないからである。

われわれはまた、巨大な虚妄が精神的不毛を醸成していることを知っている。人間喪失と内部閉塞は屈辱的生である。

われわれは、われわれの確かな意思と情熱をつなぎ合わせた高みで破壊の論理を構築し、この不毛を克服しなければならぬ。そこから創造のエネルギーを抽出し、結束して未来の設計図を描かなければならない。それは任務である。

胸の底に流れている黒いどぶ川に目をむけよう。それは合流して音高く流れ臭気をはなつだろう。臭気は日常的なきまざり性を告発せずにはおかない。傷口からぼとぼと血をわれわれのものとしよう。血と血はまぎりあい失われた人間の愛をよびもてすだろう。この時代をわれわれわのものとしよう。すべての屈辱はわれわれのもの。この苦痛の座標軸の上に明確なビジョンを創造しよう。

あらすじ、お伝えします

《『人類館』の場面構成》

時代も場所も特定できない粗末な小屋。「大和人」が沖縄についての知識で飾り立てたような雰囲気がある。「リウキウ、チョーセンお断り」と書いた札が置かれており、そこに「組の男女が「陳列」されている。サーカスの調教師風な男が登場し、「人類館」を紹介しはじめる。

男は鞭を手に「琉球館」の男女の「身体的特徴」について述べ、「琉球の土民」の住居と食事について語る。話し終えると、調教師は次のパビリオンへと去る。

陳列された男が語りはじめる。騙されて連れてこられた、人類館は刑務所よりひどく、囚人以下の奴隷だと言う。男と女の過去が少しずつ見えてくる。突然、「謝敷節」が流れ、男女は「奥山の牡丹」の首里安仁屋頭部落の場を演じる。

騒ぎを耳にして、調教師風な男がふたたび登場し、二人を叱責し、黙らせる。

男女が小屋へ戻ると、場面は突如、「二億国民こそぞって国難に対処」しなければならない戦時中へと変化する。調教師風な男は、「日本の秩序意識」の根本は日本語にあるとして、方言の使用を禁止し、男女に対して日本語の発音を教育する。

調教師がいなくなると、二人は暗睡を始める。男は口ほどにもなく、女よりも弱い。

そこに調教師が戻り、「教育勅語」を朗唱しはじめるが、他の音に乱されてしまふ。

小学校の鐘の音が響くと、突然「給食時間」になり、調教師が男女に芋を与える。調教師は女に「日本の防波堤」として、「日本人の血」が汚されないよう、外国人への性的犠牲になれと説く。男がくしゃみをする、調教師はくしゃみまで日本風でなければならぬと激怒する。

ところがいつのまにか調教師は企業で出世できず、酒を飲んで愚痴をこぼすサラリーマンになる。出世できなかった理由は「リウキウ」だからだった…。陳列されているはずの男女が、逆に調教師風の男を慰める。しかし、芋を勧めても男が食わないことから、調教師は激怒する。

すると場面は突如として取調室と化す。調教師は尋問する特高警察のようになり、男を厳しく詰問し自白を強要する。初めは話したがらなかった男が重い口を開くと沖縄戦での「集団自決」を詳細に語り始める。女はベトナム戦争帰りのアメリカ兵を相手にする売買春について語る。

突然またジェット機音が轟くと、どこから太鼓の音が聞こえ、男女はそれに操られるように「京太郎」を踊る。場面はベトナム戦争期の沖縄の精神病院になっている。調教師は精神科医として「沖縄館」を紹介する。そこに戦争帰りのアメリカ兵が爆竹を投げ込む。

再び激しい爆発音がすると、今度は沖縄戦の末期になる。調教師は日本軍人となり、女はひめゆり部隊から女子挺身隊、男は鉄血勤皇隊から郷土防衛隊へと移り変わる。軍人は、日本語の発音によって日本人か敵のスパイかを試し、男を殺す。女の連れた赤ん坊もつるさいと言って殺す。

場面はそのまま変化し、今度は調教師と男女はやんばるを逃げる地域の人びとになる。三人は、一つだけ持った手榴弾で、壕の中で全員一緒に死のうとする。

調教師は再び日本軍人に戻る。終戦を告げるアメリカ人の声が外から聞こえる。軍人である調教師は、最後の一人になっても降伏しないと言う。男女もまた、一緒に死なせてほしいと訴える。

一転、調教師は戦後の教育者になり、無駄死にせずに新生沖縄県を目指そうと呼びかける。場面は沖縄「復帰」運動の時期になっている。調教師が落ちている芋を拾い上げる。すると…。

しかし『人類館』の幕は簡単には下りない。なぜなら、「歴史は繰り返す」ものなのだから…。



